

■ 編集だより

編集後記

地方会報告について

原著、資料、総説、総会シンポジウム特集、教育講演記録などの論文が綺羅星のように散らばる精神神経学雑誌の紙面のなかで、地方会報告は最も地味な記事の一つだ。だが、目を通すとなかなか面白い。日常診療の中のちょっとした臨床観察、見落としがちな鑑別診断、予想を超えた効果や副作用、新たな治療の試みなどが、一例ないし複数例報告などの形で具体的に語られている。専門学会や全国学会で発表するほどの専門性や独創性や完成度はないが、個人や施設だけの経験に留めておくには惜しい、そういうレベルの臨床報告が地方会の演題には多い。

抄録の筆頭演者のほとんどは若手と見受けられる。若手のあとに中堅の名前が続き、末尾に大学ならば教授、病院ならば医長や院長の名前が置かれているのがよくあるパターンだ。施設で研鑽を積む若手が、遭遇した臨床例について、先輩医師の指導を受けながら熱心に診療した記録なのである。診療経験を学会発表まで結実させてゆくことは、掛け替えのない診療経験の意義をさらに倍増させる。文献に当たり、指導者と討論を重ね、症例に戻って発表内容をしっかりと考える、こういう一連の作業が観察眼を磨き思考力を深めてゆく。抄録は添削を受けているからでもあろうが、概して簡潔明瞭である。

ちなみに、2012年に発行された精神神経学雑誌114巻に掲載されたのは、北海道、東京、信州、中国・四国、近畿、東海、山陰の各地方会であり、開催頻度の関係で東京は3回分、北海道は2回分掲載されている。これら10回分の地方会の一般演題を集計すると総数は206題に及ぶ。九州と北陸の掲載がないのは、それぞれ独自の雑誌を持っているためであり、東北が欠けるのは2011年の開催が中止されたためである。これらすべての地域を加えれば、発表数は300演題にも達すると思われる。医学部卒業生の5%が精神科医になるとすれば400名程度である。演題数からみると若手精神科医の相当数が研修期間中に一度は地方会での発表を経験すると推定できる。各地の地方会が、精神医学を学び始めた若手の発表舞台として役立っていることが見て取れる。

大学以外の診療施設からの演題の割合が多いのも特徴である。114巻掲載分では約4割の81演題が、総合病院精神科、国公立および民間の精神科病院、精神保健福祉施設、クリニックなどからである。たとえば総合病院におけるリエゾン精神科医療のように、それぞれの施設の特性を生かした報告が多い。大学以外からの報告が多いと、地域精神科医療の実情の一端を読み取ることができる。

筆頭演者は若手が多いが、演題は各施設から選りすぐりであって、ときどきの精神科医療現場を鋭敏に反映している。114巻掲載分では認知症関連が24演題数えられるのは、画像診断や薬物治療の進歩もさることながら高齢化社会におけるこの疾患の診療比重の増大を物語っているのだろう。電気けいれん療法が15演題を数えるのは、有効性の再認識が広まるとともに、適応範囲、効果、副作用などに改めて検討が必要となっているからであろう。新規に導入された薬物や注目度の高い治療法はそのときどきにトピックスとなるが、この年でいえばクロザピン演題が散見される。臨床諸領域の動向を映し出して、流し読むだけでも、自身の診断学の引き出しの整理と自家薬籠の点検となること請け合いである。

本巻本号には、震災後初めての開催と聞く第66回東北精神神経学会の報告が掲載されている。東北各地の診療施設からの興味深い報告が22題並び、最後に被災地のこころのケアに関するシンポジウムが開かれたことがわかる記録である。

大森 哲郎